

葉

太宰治



葉

太宰治

撰えらばれてあることの

恍惚こうこつと不安と

二つわれにあり

ヴェルレエヌ

死のうと思っていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらつた。お年玉としてである。着物の布地は麻であつた。鼠色のこまかい縞しまめ目が織りこめられていた。これは夏に着る着物であろう。夏まで生

きていようと思った。

ノラもまた考えた。廊下へ出てうしろの扉をばたんとしめたときに考えた。帰ろうかしら。

私がわるいことをしないで帰ったら、妻は笑顔をもって迎えた。

その日その日を引きずられて暮しているだけであった。下宿屋で、たった独りして酒を飲み、独りで酔い、そうしてこそそこそ蒲団ふとんを延べて寝る夜はことにつらかった。夢をさえ見なかった。疲れ切っていた。何をするにも物憂かった。「汲くみ取り便所は如何いかに改善すべき

か？」という書物を買って来て本気に研究したこともあった。彼はその当時、従来の人糞じんぷんの処置には可成かなりまいつていた。

新宿の歩道の上で、こぶしほどの石塊いしころがのろのろ這はって歩いているのを見たのだ。石が這って歩いているな。ただそう思っていた。しかし、その石塊いしころは彼のまえを歩いている薄汚い子供が、糸で結ひきんで引ひき摺ずっているのだということが直ぐに判った。

子供に欺かれたのが淋しいのではない。そんな天変地異をも平気で受け入れ得た彼自身の自棄やけが淋しかったのだ。

そんなら自分は、一生涯こんな憂鬱と戦い、そうして死んで行くということに成るんだな、と思えばおのが身がいじらしくもあった。青

い稲田が一時にぽつと霞かすんだ。泣いたのだ。彼は狼狽うろたえだした。こんな安価な殉情的な事柄に涕なみだを流したのが少し恥かしかつたのだ。

電車から降りるとき兄は笑うた。

「莫迦ばかにしよげてるな。おい、元氣を出せよ」

そうして竜の小さな肩を扇子でポンと叩いた。夕闇のなかでその扇子が恐ろしいほど白っぽかった。竜は頬のあからむほど嬉しくなつた。兄に肩をたたいて貰ったのが有難かつたのだ。いつもせめて、これぐらいにでも打ち解けて呉くれるといいが、と果敢はかなくも願うのだつた。

訪ねる人は不在であつた。

兄はこう言った。「小説を、くだらないとは思わぬ。おれには、ただ少しまだるっこいだけである。たった一行の真実を言いたいばかりに百頁の雰囲気をしらえている」私は言い憎そうに、考え考えしながら答えた。「ほんとうに、言葉は短いほどよい。それだけで、信じさせることができるならば」

また兄は、自殺をいい気なものとして嫌った。けれども私は、自殺を処世術みたいな打算的なものとして考えていた矢先であつたから、兄のこの言葉を意外に感じた。

白状し給え。え？　誰の真似なの？

みずいた
水到りて渠成る。
きよな

彼は十九歳の冬、「あわれが哀蚊」という短篇を書いた。それは、よい作品であった。同時に、それは彼の生涯の渾沌こんとんを解くだいじな鍵かぎとなった。形式には、「ひな雛」の影響が認められた。けれども心は、彼のものであった。原文のまま。

おかしな幽霊を見たことがございます。あれは、私が小学校にあって間もなくのことです。どうせ幻燈のようにとろんと霞んでいるに違いございません。いいえ、でも、その青蚊帳あおがやに写した幻燈のような、ぼやけた思い出が奇妙にも私には年一年と愈々いよいよはつきりして参るような気がするのでございます。

なんでも姉様がお婿をとつて、あ、ちようどその晩のことでございます。御祝言の晩のことでございます。芸者衆がたくさん私の家に来て居りまして、ひとりのお綺麗きれいな半玉さんに紋附ほころの綻びを縫つて貰つたりしましたのを覚えて居りますし、父様が離座敷はなれの真暗な廊下で脊のお高い芸者衆とお相撲すもうをお取りになつていらつしやつたのもあの晩のことでございます。父様はその翌年お歿なくなりになられ、今では私の家の客間の壁の大きな御写真のなかに、おはいりになつて居られるのでございますが、私はこの御写真を見るたびごとに、あの晩のお相撲のことを必ず思い出すのでございます。私の父様は、弱い人をいじめるようなことは決してなさらないお方でございましたから、あのお相撲も、きつと芸者衆が何かひどくいけなないことをなしたので

父様はそれをお懲こらしめになつていらつしやつたのでございましょう。

それやこれやと思ひ合せて見ますと、確かにあれは御祝言の晩に違
いございませぬ。ほんとうに申し訳がございませぬけれど、なにもか
も、まるで、青蚊帳の幻燈のような、そのような有様でございしますか
ら、どうで御満足の行かれますようお話ができかねるのでございま
す。てもなく夢物語、いいえ、でも、あの晩に哀蚊の話聞かせて下
さつたときの婆様の御めめと、それから、幽霊、とだけは、あれだけ
は、どなたがなんと仰言おっしゃつたとて決して決して夢ではございませぬ。
夢だなどとおろかなこと、もうこれ、こんなにまざまざ眼先に浮んで
参つたではございせんか。あの婆様の御めめと、それから。

さようでございます。私の婆様ほどお美しい婆様もそんなにあるも

のではございませぬ。昨年こぞの夏お歿くわくなりになられましたけれど、その御死顔ごしがんと言つたら、すごいほど美しいとはあれでございましょう。白蛾はくろうの御両頬りやうほには、あの夏木立の影も映らむばかりでございました。そんなにお美しくいらつしやるのに、縁遠くて、一生鉄漿かねをお附けせずにお暮しなさつたのでございます。

「わしという万年白歯を餌にして、この百万の身代ができたのじゃぞえ」

富本でこなれた洩い声で御生前よくこう言い言いして居られましたから、いずれこれには面白い因縁でもあるのでございましょう。どんな因縁なのだろうなどと野暮なお探りはお止よしなさいませ。婆様がお泣きなさるでございましょう。と申しますのは、私の婆様は、それは

それは粹いきなお方で、ついに一度も縮緬ちりめんの縫紋の御羽織をお離しになつたことがございませんでした。お師匠をお部屋へお呼びなされて富本のお稽古けいこをお始めになられたのも、よほど昔からのことでございましてでしょう。私なども物心地が附ついてからは、日がな一日、婆様の老おい松まつやら浅間あさまやらの咽むせび泣くような哀調のなかにうつとりしているときがままございました程で、世間様から隠居芸者とはやされ、婆様御自身もそれをお耳にしては美しくお笑いになつて居られたようでございました。いかなることか、私は幼いときからこの婆様が大好きで、乳母から離れるとすぐ婆様の御懷に飛び込んでしまったのでございませす。もつとも私の母様は御病身でございました故、子供には余り構うて呉れなかつたのでございます。父様も母様も婆様のほんとうの御子

ではごさいませぬから、婆様はあまり母様のほうへお遊びに参りませ
ず四六時中、離座敷のお部屋にばかりいらっしやいますので、私も婆
様のお傍そばにくつついて三日も四日も母様のお顔を見ないことは珍ら
しゅうございませんでした。それゆえ婆様も、私の姉様なぞよりずつ
と私のほうを可愛がつて下さいまして、毎晩のように草双紙くさそうしを読んで
聞かせて下さったのでございます。なかにも、あれあの八百屋お七の
物語を聞いたときの感激は私は今でもしみじみ味うことができるので
ございます。そしてまた、婆様がおたわむれに私を「吉三」きちざ「吉三」
とお呼びになって下さった折のその嬉しさ。らんぷの黄色い燈火ともしびの下
でしょんぼり草双紙をお読みになっけいらっしやる婆様のお美しい御
姿、左様、私はことごとくよく覚えているのでございます。

とりわけあの晩の哀蚊の御寝物語は、不思議と私には忘れることができないのでございます。そう言えばあれは確かに秋でございました。

「秋まで生き残されている蚊を哀蚊と言うのじゃ。蚊燠かいぶしは焚たかぬもの。不憫ふびんの故にな」

ああ、一言一句そのまんま私は記憶して居ります。婆様は寝ながら滅入めいるような口調でそう語られ、そうそう、婆様は私を抱いてお寝になられるときには、きまって私の両足を婆様のお脚のあいだに挟んで、温めて下さったものでございます。或る寒い晩なぞ、婆様は私の寝巻をみんなお剥はぎとりになっておしまいになり、婆様御自身も輝くほどお綺麗な御素肌をおむきだし下さって、私を抱いてお寝になりお

温めなされてくれたこともございました。それほど婆様は私を大切に
していらっしゃったのでございます。

「なんの。哀蚊はわしじゃがな。はかない……」

仰言りながら私の顔をつくづくと見まもりましたけれど、あんなに
お美しい御めめもないものでございます。母屋おもやの御祝言の騒ぎも、も
うひっそり静かになっていたようでございましたし、なんでも真夜中
ちかくでございましたでしょう。秋風がさらさらと雨戸なを撫でて、軒
の風鈴がその度毎に弱弱しく鳴って居りましたのも幽かすかに思いだすこ
とができるのでございます。ええ、幽霊を見たのはその夜のことでご
ざいます。ふっと眼をさましまして、おしっこ、と私は申しましたの
でございます。婆様の御返事がございませんでしたので、寝ぼけなが

らあたりを見廻しましたけれど、婆様はいらっしゃらなかったの
でございませう。心細く感じながらも、ひとりでそっと床から脱け出しまし
て、てらてら黒光りのする櫺けやき普請の長い廊下をこわごわおかわや厠のほう
へ、足の裏だけは、いやに冷や冷やして居りましたけれど、なにさま
眠くって、まるで深い霧のなかをゆらりゆらり泳いでいるような気持
ち、そのときです。幽霊を見たのでございませう。長い長い廊下の片隅
に、白くしゅんぼり蹲うずくまって、かなり遠くから見たのでございませう
から、ふいるむのように小さく、けれども確かに、確かに、姉様と今
晩の御婿様とお寝になつて居られるお部屋を覗のぞいているのでござい
ませう。幽霊、いいえ、夢ではございませぬ。

芸術の美は所詮^{しよせん}、市民への奉仕の美である。

花きちがいの大工がいる。邪魔だ。

それから、まち子は眼を伏せてこんなことを囁^{ささや}いた。

「あの花の名を知っている？ 指をふれればちゃんとわれて、きたない汁をはじきだし、みるみる指を腐らせる、あの花の名が判ったらねえ」

僕はせせら笑い、ズボンのポケットへ両手をつっ込んでから答えた。

「こんな樹の名を知っている？ その葉は散るまで青いのだ。葉の裏

だけがじりじり枯れて虫に食われているのだが、それをこつそりかくして置いて、散るまで青いふりをする。あの樹の名さえ判ったらねえ」

「死ぬ？　死ぬのか君は？」

ほんとうに死ぬかも知れないと小早川は思った。去年の秋だったかしら、なんでも青井の家に小作争議が起ったりしていろいろのごたごたが青井の一身上に振りかかったらしいけれど、そのときも彼は薬品の自殺を企て三日も昏睡こんすいし続けたことさえあったのだ。またついせんだって、僕がこんなに放蕩ほうとうをやめないのもつまりは僕の身体がまだ放蕩に堪え得るからであろう。去勢されたような男にでもなれば僕は

始めて一切の感覚的快樂をさけて、鬭争への財政的扶助に専心できるのだ、と考えて、三日ばかり続けてP市の病院に通い、その伝染病舎の傍の泥溝どぶの水を掬すくって飲んだものだそうだ。けれどもちよつと下痢をしただけで失敗さ、とそのことを後で青井が頼あからめて話すのを聞き、小早川は、そのインテリ臭い遊戯をこのうえなく不愉快に感じたが、しかし、それほどまでに思いつめた青井の心が、少からず彼の胸を打ったのも事実であつた。

「死ねば一番いいのだ。いや、僕だけじゃない。少くとも社会の進歩にマイナスの働きをなしている奴等は全部、死ねばいいのだ。それとも君、マイナスの者でもなんでも人はすべて死んではならぬという科学的な何か理由があるのかね」

「ば、ばかな」

小早川には青井の言うことが急にばからしくなつて来た。

「笑つてはいけない。だつて君、そうじゃないか。祖先を祭るために生きていなければならぬとか、人類の文化を完成させなければならぬとか、そんなたいへんな倫理的な義務としてしか僕たちは今まで教えられていないのだ。なんの科学的な説明も与えられていないのだ。そんなら僕たちマイナスの人間は皆、死んだほうがいいのだ。死ぬとゼロだよ」

「馬鹿！ 何を言つていやがる。どだい、君、虫が好すぎるぞ。それは成る程、君も僕もぜんぜん生産にあづかつていない人間だ。それだからとて、決してマイナスの生活はしていないと思うのだ。君はいつ

たい、無産階級の解放を望んでいるのか。無産階級の大勝利を信じているのか。程度の差はあるけれども、僕たちはブルジョアジイに寄生している。それは確かだ。だがそれはブルジョアジイを支持しているのとはぜんぜん意味が違うのだ。一のプロレタリアアトへの貢献と、九のブルジョアジイへの貢献と君は言ったが、何を指してブルジョアジイへの貢献と言うのだろう。わざわざ資本家の懐を肥してやる点では、僕たちだってプロレタリアアトだって同じことなんだ。資本主義的経済社会に住んでいることが裏切りなら、闘士にはどんな仙人が成るのだ。そんな言葉こそウルトラというものだ。キンデルクランクハイト小児病というものだ。一のプロレタリアアトへの貢献、それで沢山。その一が尊いのだ。その一だけの為に僕たちは頑張って生きていなければならぬの

だ。そうしてそれが立派にプラスの生活だ。死ぬなんて馬鹿だ。死ぬなんて馬鹿だ」

生れてはじめて算術の教科書を手にした。小型の、まっくろい表紙。ああ、なかの数字の羅列られつがどんなに美しく眼にしみたことか。少年は、しばらくそれをいじくっていたが、やがて、巻末のペエジペエジにすべての解答が記されているのを発見した。少年は眉をひそめて呟つぶやいたのである。「無礼だなあ」

外はみぞれ、何を笑うやレニン像。

叔母の言う。

「お前はきりようがわるいから、愛嬌^{あいきよう}だけでもよくなさい。お前はからだが弱いから、心だけでもよくなさい。お前は嘘^{うそ}がうまいから、行いだけでもよくなさい」

知っていながらその告白を強いる。なんといういんけんな刑罰であろう。

満月の宵。光っては崩れ、うねっては崩れ、逆巻き、のた打つ浪のなかで互いに離れまいとつないだ手を苦しまぎれに俺が故意^{わざ}と振り切ったとき女は忽ち浪に吞まれて、^{たちま}たかく名を呼んだ。俺の名ではな

かった。

われは山賊。うぬが誇をかすめとらむ。

「よもやそんなことはあるまい、あるまいけれど、な、わしの銅像をたてるとき、右の足を半歩だけ前へだし、ゆったりとそりみにして、左の手はチョッキの中へ、右の手は書き損じの原稿をにぎりつぶし、そうして首をつけぬこと。いやいや、なんの意味もない。雀の糞を鼻のあたまに浴びるなど、わしはいやなのだ。そうして台石には、こう刻んでおくれ。ここに男がいる。生れて、死んだ。一生を、書き損じの原稿を破ることに使った」

メフィストフェレスは雪のように降りしきる薔薇ばらの花弁に胸を頬を掌を焼きこがされて往生したと書かれてある。

留置場で五六日を過して、或る日の真昼、俺はその留置場の窓から脊のびして外を覗くと、中庭は小春の日ざしを一杯に受けて、窓ちかくの三本の梨の木はいずれもほつほつと花をひらき、そのしたで巡査が二三十人して教練をやらされていた。わかい巡査部長の号令に従って、皆はいっせいに腰から捕縄を出したり、呼笛を吹きならしたりするのであった。俺はその風景を眺め、巡査ひとりひとりの家について考えた。

私たちは山の温泉場であてのない祝言をした。母はしじゅうくつくと笑っていた。宿の女中の髪のかたちが奇妙であるから笑うのだと母は弁明した。嬉しかったのであろう。無学の母は、私たちを炉ばたに呼びよせ、教訓した。お前は十六魂たましだから、と言いかけて、自信を失ったのであろう、もっとと無学の花嫁の顔を覗き、のう、そうでせんか、と同意を求めた。母の言葉は、あたっていたのに。

妻の教育に、まる三年を費やした。教育、成ったころより、彼は死のうと思いはじめた。

病む妻や　とどこおる雲　鬼すすき。

赤え赤え煙こあ、もくらもくらと蛇体じゃたいみたいに天さのぼつての、ふくれた、ゆららと流れた、のっそらと大浪うった、ぐるっぐるつと渦まえた、間もなくし、火の手あ、ののののと荒けなくなり、地ひびきたてたて山ばのぼり始めたずおん。山あ、てっぺらまで、まんどろに明るくなったずおん。どうどうと燃えあがる千本万本の冬木立ば縫い、人を乗せたまっくろい馬こあ、風みたいに馳はせていたずおん。
(ふるさとの言葉で)

たった一言知らせて呉れ！ “Nevermore”

空の蒼あおく晴れた日ならば、ねこはどこからかやって来て、庭の山茶さざん

花^かのしたで居眠りしている。洋画をかいている友人は、ペルシャでな
いか、と私に聞いた。私は、すてねこだろう、と答えて置いた。ねこ
は誰にもなつかなかつた。ある日、私が朝食の鰯^{いわし}を焼いていたら、庭
のねこがものうげに泣いた。私も縁側へでて、にやあ、と言った。ね
こは起きあがり、静かに私のほうへ歩いて来た。私は鰯を一尾なげて
やった。ねこは逃げ腰をつかいながらもたべたのだ。私の胸は浪うつ
た。わが恋は容れ^いられたり。ねこの白い毛を撫でたく思い、庭へおり
た。脊中の毛にふれるや、ねこは、私の小指の腹を骨までかりりと噛^か
み裂いた。

役者になりたい。

むかしの日本橋は、長さが三十七間四尺五寸あったのであるが、いまは廿七間しかない。それだけ川幅がせまくなったものと思わねばいけない。このように昔は、川と言わず人間と言わず、いまよりはるかに大きかったのである。

この橋は、おおむかしの慶長七年に始めて架けられて、そのちたびばかり作り変えられ、今のは明治四十四年に落成したものである。大正十二年の震災のときは、橋のらんかんに飾られてある青銅の竜の翼が、ほのお焰に包まれてまっかに焼けた。

私の幼時に愛した木版の東海道五十三次道中すごろく双六では、ここが振りだしになっていて、幾人ものやつこのそれぞれ長い槍を持ってこの橋のうえを歩いている画が、のどかにかかれてあった。もとはこんなぐ

あいに繁華であつたのであろうが、いまは、たいへんさびれてしまつた。うおがし魚河岸が築地つきじへうつつてからは、いつそう名前もすたれて、げんざいは、たいていの東京名所絵葉書から取除かれている。

ことし、十二月下旬の或る霧のふかい夜に、この橋のたもとで異人の女の子がたくさんの乞食こじきの群からひとり離れて佇たたずんでいた。花を売っていたのは此の女の子である。

三日ほどまえから、黄昏たそがれどきになると一束の花を持ってここへ電車ですべて来て、東京市の丸い紋章にじやれついている青銅の唐獅子からじしの下で、三四時間ぐらい黙つて立っているのである。

日本のひとは、おちぶれた異人を見ると、きつと白系の露西亞人ロシアにきめてしまう憎い習性を持っている。いま、この濃霧のなかで手袋の

やぶれを気にしながら花束を持って立っている小さい子供を見ても、
おおかたの日本のひとは、ああロシアがいる、と楽な気持ちで呟くにち
がいない。しかも、チエホフを読んだことのある青年ならば、父は退
職の陸軍二等大尉、母は傲慢な貴族、とうつとりと独断しながら、す
こし歩をゆるめるであろう。また、ドストエーフスキイを覗きはじめ
た学生ならば、おや、ネルリ！ と声を出して叫んで、あわてて外套
の襟を搔きたてるかも知れない。けれども、それだけのことであつ
て、そのうえ女の子に就いてのふかい探索をして見ようとは思わな
い。

しかし、誰かひとりが考える。なぜ、日本橋をえらぶのか。こん
な、人通りのすくないほの暗い橋のうえで、花を売ろうなどというの

は、よくないことなのに、――なぜ？

その不審には、簡単ではあるが頗るすこぶロマンチックな解答を与え得るのである。それは、彼女の親たちの日本橋に対する幻影に由来している。ニホンでいちばんにぎやかな良い橋はニホンバシにちがいない、という彼等のおだやかな判断に他ならぬ。

女の子の日本橋でのあきないは非常に少なかった。第一日目には、赤い花が一本売れた。お客は踊子である。踊子は、ゆるく開きかけている赤いつばみ蕾を選んだ。

「咲くだろうね」

と、乱暴な聞きかたをした。

女の子は、はつきり答えた。

「咲キマス」

二日目には、酔いどれの若い紳士が、一本買った。このお客は酔つていながら、うれしい顔をしていた。

「どれでもいい」

女の子は、きのうの売れのこりのその花束から、白い蕾をえらんでやったのである。紳士は盗むように、こっそり受け取った。

あきないはそれだけであつた。三日目は、即ちきようである。つめたい霧のなかに永いこと立ちつづけていたが、誰もふりむいて呉れなかった。

橋のむこう側にいる男の乞食が、松葉杖つきながら、電車みちをこえてこっちへ来た。女の子に縄張りのことと言いがかりをつけたの

だった。女の子は三度もお辞儀をした。松葉杖の乞食は、まっくろい口鬚くちひげを噛みしめながら思案したのである。

「きよう切りだぞ」

とひくく言つて、また霧のなかへ吸いこまれていった。

女の子は、間もなく帰り仕度をはじめた。花束をゆすぶつて見た。

花屋から屑花くずはなを払いさげてもらつて、こうして売りに出てから、もう

三日も経っているのであるから花はいい加減にしおれていた。重そうにうなだれた花が、ゆすぶられる度毎に、みんなあたまを顫ふるわせた。

それをそつと小わきにかかえ、ちかくの支那蕎麦しなそばの屋台へ、寒そうに肩をすぼめながらはいつて行つた。

三晩つづけてここで雲吞ワンタンを食べるのである。そこのあるじは、支那

のひとであつて、女の子を一人並の客として取扱つた。彼女にはそれが嬉しかったのである。

あるじは、雲吞^{ワンタン}の皮を巻きながら尋ねた。

「売レマシタカ」

眼をまるくして答えた。

「イイエ。……カエリマス」

この言葉が、あるじの胸を打った。帰国するのだ。きっとそうだと美しく禿^はげた頭を二三度かるく振った。自分のふるさを思いつつ釜から雲吞の実を掬っていた。

「コレ、チガイマス」

あるじから受け取った雲吞の黄色い鉢を覗いて、女の子が当惑そう

に呟いた。

「カマイマセン。チャシユウワンタン。ワタシノゴチソウデス」

あるじは固くなって言った。

雲吞は十銭であるが、チャシユウワンタン又焼雲吞は二十銭なのである。

女の子は暫くもじもじしていたが、やがて、雲吞の小鉢を下へ置

き、肘ひじのなかの花束からおおきい蕾のついた草花を一本引き抜いて、

差しだした。くれてやるというのである。

彼女がその屋台を出て、電車の停留場へ行く途中、しなびかかった悪い花を三人のひとに手渡したことをちくちく後悔しだした。突然、道ばたにしゃがみ込んだ。胸に十字を切って、わけの判らぬ言葉でもって

烈^{はげ}しいお祈りをはじめたのである。

おしまい日本語を二言囁いた。

「咲クヨウニ。咲クヨウニ」

安楽なくらしをしているときは、絶望の詩を作り、ひしがれたくらしをしているときは、生のよろこびを書きつづる。

春ちかきや？

どうせ死ぬのだ。ねむるようなよいロマンスを一篇だけ書いてみた。男がそう祈願しはじめたのは、彼の生涯のうちでおそらくは一番

うつとうしい時期に於いてであつた。男は、あれこれと思いをめぐらし、ついにギリシャの女詩人、サフォに黄金の矢を放つた。あわれ、そのかぐわしき才色を今に語り継がれているサフォこそ、この男のもやもやした胸をときめかす唯一の女性であつたのである。

男は、サフォに就いての一二冊の書物をひらき、つぎのようなことがらを知らされた。

けれどもサフォは美人でなかつた。色が黒く齒が出ていた。ファオンと呼ぶ美しい青年に死ぬほど惚ほれた。ファオンには詩が判らなかつた。恋の身投をするならば、よし死にきれずとも、そのこがれた胸のおもいが消えうせるという迷信を信じ、リュウカディアの岬から怒濤どとうめがけて身をおどらせた。

生活。

よい仕事をしたあとで

一杯のお茶をすす

る
お茶のあぶくに

きれいな私の顔が

いくつもいくつも

うつっているのさ

どうか、なる。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
